論文集「高分子化学」の現状

藤 井 光 雄*

本会論文集「高分子化学」の現状について簡単に説明し、会員諸氏のご理解を得たいと思う。

どの学会でも、その最も主な事業は研究発表機関として積極的に活動することであり、本会ももちろんその例に洩れない。本会がこの面において、すでに世界的権威として確たる地位を築いたことは周知の事実である。これはいうまでもなく歴代会長、理事ならびに会員の努力と協力と事務担当者の内助の成果によるものであるが、その中で「高分子化学」の果たした役割は決して小さいものではない。

「高分子化学」の内容が充実するにつれ、海外の学会もこれを無視することができなくなってきた。Die makromolekulare Chemie との間における論文要旨の交換掲載もこの具体的一例であり、また最近岡村誠三教授を通じて、アメリカの John Wiley & Sons, Inc. 刊行の Polymer Previews よりの論文題目の掲載要望（具体的点については交渉中）もあり、洛陽の紙価を高めつつあることはまことにご同慶の至りに耐えないところである。

さて研究者が学会に研究発表を行なう場合に、最も強く要求されることは、その論文が一刻もすみやかに印刷公表されることにある。またこの要求に対し学会は応える義務があるものと確信している。もちろんこの点についてはわれわれ編集に関係するものは努力を怠らないつもりであるが、学会における定期刊行物というものの持つ宿命的物理的条件によって若干の制約を受けることも避けがたいのである。

原稿が活字に至る期間は、円滑な刊行その他の技術的問題から考えて、原稿受理後4ヵ月ぐらいが一応の最短期間と考えられる。

このような期間が定常状態となるためには、二三の重要な条件が満足されなければならないのであるが、その条件中支配的なものは受理原稿数と掲載数の一致にある。

近年ますます高分子に関する研究が盛んとなり、本会への投稿数も増加の一途をたどっているが、一方「高分子化学」の掲載量に限度のある現状において、まことに残念ではあるが、需給関係のバランスが崩れつつあるのが真相である。バランス保持の一つの方法として、1, 4, 7 および 10 月号を倍大号として掲載数の増加を計っているが、この手段によっても打解が困難となってきた。そこで特に臨時措置として本年の 11 および 12 月号を倍大号とすることを理事会において許可を受け、一時的にすぎないが、急場を切り抜けることとした。このようなことは予算の裏付けを必要とするため簡単な問題ではないのである。

第1図のAおよびBは昭和39年の実体を示したものである。B図で明らかなごとく、累計曲線の不一致は結局積み残しを生じ、時間的遅れの原因となるのである。翌年にこれがすみやかに吸収されればよいのであるが、しかし昭和40年の実状を示したC図およびD図で明らかなごとく、投稿数の増加は、両曲線のずれをますます大きくし、このままで事態を推移させることが許されないことを明示しているのである。どうしても抜本的方策の実施をすみやかに考慮しなければならないことを物語っている。このようなことで遅延度が増大し、ひいては本会を通じての研究発表の意欲を減退させるがごとき傾向を生じては一大事である。

なにはともあれ、論文の印刷公表に至る平均速度の増大は編集者に課せられた最大の使命の一つであることをよく認識し、いろいろな技術的障害を除去する努力は怠らないつもりである。この障害にもいろいろあるが、投稿者の投稿規定の厳守、文体や誤字についての十分な配慮も結局障害除去の一つの方法にな

* Mitsuo FUJII 慶応義塾大学教授・「高分子化学」編集委員長・工博

第 1 図

るのであって、この点の手落ちは時間の浪費の大きな原因となることがある。

論文の審査に意外に手間のかかることがあるが、審査そのものに時間を要する場合もあり、また審査専業というわけにもいかないで、やむをえない事情も多い。しかし迅速な処理はあくまでも大きな目標と考えており、なにかと配慮している次第である。

またいささか世帯じみた手段ではあるが、活字の大きさや組み方の考慮も、わずかではあるが、障害の克服に役立つものと考えており、いろいろと工夫しているが、この問題は歴史的にみればずいぶんと改良のあとがみられるものと思う。

血と汗の結晶というより、研究者の生命そのものである研究論文の取扱は、事務的にはもちろん手落ちの絶無を期し、また各種処理中における厳重なる監視については、他の学会には見られないと思われる方式を採用し、受理から最終処置である印刷、さらに校正に至るまで遺漏なきを期しているが、掲載数の増加は自ら別問題であり、昭和 41 年にはこの問題を一つの大きな課題として、予算措置その他について関係方面のご理解を得たいと思っている。

以上「高分子化学」の現状についての内輪話を述べたが、現在の時点における実状のご理解が得られれば幸いである。昭和 40 年を送るにあたり、来年の多彩な行事を想いつつ、本会の いっそうの発展を祈り、一文を草した次第である。